

二次元ぷち文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

魔法少女
セイクリッド
エンジェル

火村龍
表紙/ごごけつ桃



試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『魔法少女セイクリッドエンジェル 前編』
『魔法少女セイクリッドエンジェル 後編』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



魔法少女
セイクリッド
エンジェル

火村龍

表紙 / ごくげつ桃

登場人物紹介

Characters

ひめのゆり

姫乃百合

セイクリッドリリーに変身して戦う少女。氷の力を操り、妹の愛とともに、悪の組織ハザドとその手先であるデーモニックローズを撃退する。学園では生徒会長を務めている。

あい

姫乃愛

百合の妹。セイクリッドアイリスに変身し、炎の力を操って戦う。姉に比べて直情的であり、また、百合に依存しがちな甘えん坊。百合がいないと精神的に不安定になることも。

デーモニックローズ

悪の魔法少女。元は正義の魔法少女だったが、ハザドに洗脳されてしまった。その力は強力で、百合と愛が力を合わせて初めて互角に戦えるほど。

「以上で、わたしの話はおしまいです。みなさん、今日も楽しく過ごしましょうね」

外はあいにくの曇り空だったが、街外れにある名門校に響き渡る生徒会長の声は、どこまでも澄み渡っていて、どんよりとした気分を晴れやかにさせた。

壇上で朝礼を終えた生徒会長——姫乃愛がお辞儀をして壇上から降りると、生徒たちの間から盛大な拍手が湧いた。にこにここと笑ってそれに応える愛を、姫乃百合は優しく微笑んで見つめる。

「相変わらず可愛いなあ」「ほんと、憧れちゃうわね!」「来年は百合があそこに立つのかしらね?」

口々に愛を褒める生徒たち。何人かは、妹の百合に悪戯っぽい笑みで問いかけてくる。「もうっ、からかわないでよね!」

百合は笑いながらそう言い返すが、その顔はまんざらでもなさそうだ。

——姫乃姉妹。

この学園始まって以来最も優秀な生徒として、その名を学園内で知らぬ者はいないほどの二人だ。学問やスポーツにおける優秀さもさることながら、その容姿も飛び抜けて可愛く、密かに作られたファンクラブには男子だけでなく女子も多数入会しているという。姉妹の仲はまるで恋人のように睦まじく、愛や百合に恋をしても、二人の邪魔をしたくないと告白を断念する男が後を絶たない。

また、その人柄も人を惹きつけてやまない素晴らしいもので、姉は清楚でおしとやか、妹は活発で話しかけやすいと、どこを見ても欠点が見られない姉妹だった。

たおやかに微笑む愛の胸はDカップを軽く越え、腰はキュツと引き締まっているのに尻や太ももはムチムチと媚肉がつき、ニーソックスとスカートの間の絶対領域は男女問わず目を留めずにはいられない。顔はくりくりとした優しい眼差しにほんのりと染まった柔らかな頬。髪は艶やかで、唇はリップクリームなど必要ないほど瑞々しく、緊張が解けて少し疲れた顔もなんともいえない美しさに輝いていた。

対する百合は、姉同様可愛らしい顔立ちだが、姉とは違い勝ち気で意志の強そうな瞳をしている。艶やかな髪を紅いリボンでツイントールに纏めており、柔らかで優しい雰囲気。の姉とは逆に小悪魔的な印象を与える。スタイルは姉と同じく、ほどよく媚肉が乗った抜群のスタイルだ。美の女神のような姉妹だが、その性格の違いから、みんなの接し方に大きな違いがある。

「百合があそこに立ったら笑っちゃうよな」「もうちょっとおしとやかだったらなあ」「胸もないし」

「うっさい！ 聞こえてるっての!! あとでひどいんだからねっ」

百合は少し気が強いところもあるが、誰にでも分け隔てなく接し、いつも明るいらリアクションを返してくれるためその人気はとどまるところを知らない。

「愛さん、ごめんなさい……資料作ってなくて……」

「大丈夫よ。わたしが手伝うから……ね？ ほら、そんな顔しないで」

愛はいつでもニコニコと優しく、どんなことでも受け入れてくれるため、彼女の周りには相談事を持ちかける生徒が集まってきた。

解散を告げられた体育館内で、姉妹の周りには自然と人が集まってくる——そのときだった。

——キイイイイイン！

姉妹の身体を、不穏な気配が駆け抜けた。そして、愛の頭に百合の声が響く。

(っ?! お姉ちゃん!)

(ええ、この邪悪な気配……ハザドね!)

先ほどまでの楽しそうな笑顔は鳴りを潜め、二人の瞳に真剣な光が宿る。

「おい！ 街にあいつらが出たらしいぞ！」「またかよ!」「あ、あれっ？ 愛と百合は？」
ざわつく体育館で、二人の女神がいなくなっていることに気づいた数人の生徒たちが首を傾げる。人混みの中、美少女姉妹の姿は霞のようにかき消えていた。

*

「さあ、触手ども！ もつと暴れなさい!!」

ドガアアアアアアンツ!! ビルの窓ガラスが割れ、人々の悲鳴があがる。

「うわあああああつ!!」「な、なんだあつ!?!」「キャ————!!」「ま、また怪物だあつ」

繁華街の大通り、その中心に佇んでいたのは、派手な赤紫コスチュームに身を包んだ美少女だ。ピンヒールブーツがコンクリートを踏みしめ、少女の周りを浮遊する水晶はパチパチと電撃を纏い周囲を威嚇する。

だが、その少女本人は破壊行動をしていくわけではない。窓ガラスを破壊し、逃げ惑う人々に危害を加えようとしているのは、ねちよねちよと気持ち悪い粘液を出しながら蠢く、たくさんの触手たちだった。

「アーツハツハツハ! バカな人間ども、わたしたちハザドの前に跪くがいいわ!!」

ここ数ヶ月の間、街は怪物を操る異界の集団に襲われていた。警察の銃などものともせず、破壊の限りを尽くす悪の化身。人々は逃げ惑う以外に為す術がなく、街を逃げ出す者も後を絶たない。

だが、破壊を続ける闇があれば、それに飲み込まれそうになる者を助けんとする光がある。勝ち誇った哄笑を響かせる少女の嗤いを遮るように、凜と響く正義の聲が人々の耳に届いた。

「お待ちなさいっ!! デーモニックローズ、あなたの好きにはさせません!!」

「チッ！ もう来たの!!」

その声に、悪の魔法少女デーモニクローズは舌を打ち鳴らし、あからさまに不快を表す。対し、人々の顔には光が灯り、笑顔すら浮かべてビルの上に立つ二人に応援を飛ばした。「やった!」「来てくれたぞ!!」「お願い、やっつけてっ」

みんなの声援を受け、いつの間にか顔を出した太陽を背にした二人はビルの屋上から躊躇なく飛び降りる。人々は後のことを二人に任せ、安全な場所に避難を始めた。

「煌めく氷は未来への道しるべ! 魔法少女セイクリッドアイリス、参上!」

「燃え盛る炎で悪を討つ! 魔法少女セイクリッドリリー、見参!」

お互いにキメ台詞を叫び、ビシッとポーズをとる二人の魔法少女。悪の魔法少女に勝るとも劣らない美貌を持つ少女たちは、それをさらに引き立てるコスチュームを纏っていた。青い長髪を靡かせるセイクリッドアイリスは、白を基調とし水色の装飾をつけた、Eカップはあるであろう巨乳をぴっちりと覆い隠すスク水型の密着コスチュームを纏っている。胸元には水色のリボンがつけられ、二の腕までの水色ロンググローブに太ももに食い込む純白ニーソックス、膝下までの水色ロングブーツでムチムチな肢体をぴっちりと守っている。また、水色スカートやグローブ、ブーツの履き口などには白いファーがつけられ、碧眼の魔法少女を可愛らしく彩っていた。

その隣に並ぶセイクリッドリリーは、ピンクの髪をツインテールに纏め、紅く燃える瞳

で敵を睨みつけていた。アイリスと同じく胸元にピンクのリボンをあしらった、白を基調としたコスチュームは桃色の装飾を施した密着ドレス型で、ひらひらと揺れるミニスカートからは桃尻を包むピンクのパンティが覗いている。Dカップの胸はこれ見よがしにプルンと揺れ、肘までの純白グローブ、白に桃色のラインが入った膝下ルーズブーツからはわずかに煙が上がっていた。

（お姉ちゃん！）

（ええ、行くわよ!!）

魔力を使った通信で、目を合わすことなく意思の疎通を行う二人——。セイクリッドアイリスに変身した愛と、セイクリッドリリーに変身した百合は、悪の魔法少女と触手を止めるべくその小さな身体に力をこめた。

「先手必勝だよ！ たあああああつ!!」

翻るスカートからパンティが見えるのも構わず、リリーは地を蹴って触手に突っ込む。ポポツという音とともにリリーの手袋とブーツに炎が灯り、灼熱のコスチュームで触手たちをなぎ払った。

「チィッ！ 触手ども！ リリーを捕らえなさい!!」

すかさず触手に指示を飛ばす漆黒の魔法少女。だが——。

「ローズ、好きにはさせないっていったでしょう!! アイリスバトン!!」

凜とした声が響き渡った瞬間、リリーを狙っていた触手たちがすべて凍り付く。

「くっ!! アイリスウウツツ!!」

怨嗟の声をあげるローズの視線の先には、先端にハートを光らせた水色バトンを持った、セイクリッドアイリスの姿があった。

「ローズううつつ!!」

その隙に、リリーは一人でローズに向かって駆けだして行く。その瞳には悪を憎む炎が燃え、想いに呼応するように手脚の炎が勢いを強める。

「リリー、焦っちゃダメよ!! アイリスブリザ……くうっ! 邪魔しないでっ」

アイリスは慌てて妹の援護をしようとするが、触手に阻まれそちらの相手を余儀なくされた。

「ローズ、いっつもいっつも悪いことばかりして、今日はもう許さないんだからっ!! たあっ、やあっつ!!」

「お前たちこそ邪魔なのよッ! 二人いなくちゃ未熟者の雑魚が!!」

「うるさいっ! はあああ、リリー・セイクリッド・フレイム!!」

ローズブーツに極大の炎を纏わせたリリーのキックがローズに迫る。だが、歴戦の魔法少女はリリーの必殺技を鼻で笑うと片手で受け止めた。

「フンッ、どうやら焦りすぎたみたいね。こんな蹴り、弱すぎるのよッ!!」

「あぐっ！　う、嘘でしょっ!?　は、離して!!」

燃え盛るソールを掴んでいるのに、黒い手袋は傷一つない。一瞬啞然としたリリーは、焦って掴まれた右脚を動かそうとするが、ブーツをがっしりと捕らえたローズから逃れることができない。そうしている間に、電撃を纏ったローズの水晶が近づいてきた。

「このちょこまかと鬱陶しい脚、使い物にならなくしてあげるわ!!　デーモニック・サンダー!!」

ビリッ！　バリバリイイイイイイイイツツツ!!

「きやあああああつつつつ!!　脚がつ！　あああつ!!　はひいひいひいひいひいっ!!」

水晶から放たれた雷撃は、炎を纏ったりリリーの脚に絡みつき、太ももまで走り抜ける。魔力で作られたコスチュームはその威力を殺そうとするが、未熟なリリーのエナジーで作られたそれは完全に防ぐことはできず、リリーの身体を痛めつけた。

「あぐうつ！　はっ、はあつ……う、ううう……脚が……う、動かないよお……!!」

雷撃がやみ解放されたリリーは、あまりの痛みに涙を浮かべ、しゃがみ込んで脚を押さえる。ブーツに灯っていた炎はかき消え、白とピンクのコントラストが可愛らしかったローズブーツはどこどころ黒く焼け焦げていた。

「こ、このお……!　ローズう……!!　う……戦わなくちゃ……くっ、た、立てない……」
「フン、雑魚がわたしにたてつくからこうなるのよ……消えなさい、セイクリッドリリー」

……ッ!? チイイツ!!」

ゴオオオオオオッ!! リリーにトドメを刺そうとしたローズに、氷の塊が飛んでくる。ローズの目に、すべての触手が凍り付き、ガラガラと音を立てて崩れ落ちていく光景が映った。

「さすがに時間をかけすぎたかしら……なにっ!? ぐはっっ」

氷を避け、悠長に笑みを浮かべたローズの表情が凍り付く。飛んできていた氷が割れ、中から青い髪を靡かせた魔法少女が飛び出し、ローズを蹴り飛ばしたのだ。

「リリー! 大丈夫……ッ!? ひどい怪我!」

「ううっ、わたしは大丈夫だよ……。それより、早く攻撃を!」

「っ……わかったわ!」

リリーは、アイリスの肩を借りて立ち上がると、アイリスの手をギュッと握りしめる。たたらを踏んだローズは、二人の魔法少女が手を握ったのを見ると、忌々しげに舌打ちをし、触手を喚び出しつつ転移呪文を唱える。

「くっ……! 今回もダメか……。でも、傷は負わせたわ」

「ローズ! ハザドに伝えなさい!! わたしたちがいる限り、あなたたちの好きにはさせません!!」

「そうよ! どんなにやられても、わたしたちは立ち上がってあなたたちみんなやつつけ

るんだから!!」

そして、手を合わせた二人の魔法少女は、二人の力を合体させローズに放った。

『セイクリッド・ライトニング!!』

ゴオツツツ!! 必殺技を叫んだ瞬間、合わさった魔力が光の電撃となり、触手たちを吹き飛ばしながらローズに迫る。

「クツ……転移魔法が……ぐ、あああああああああつつつ!!」

転移魔法の発動が一瞬遅れたローズは、なにかに抵抗するかのようには手を振ると、次の瞬間雷撃に飲み込まれていた。変身ヒロイン姉妹の攻撃はすべての敵を倒し尽くし、魔法が霧散した後には平和のみが残っていた。

「やったねお姉ちゃん! また勝ったよ!! く、痛……っ!」

「百合! 無茶しちやダメっていったでしょ!! ほら、早く治療しないと……」

顔を歪めるリリーを支え、アイリスはグローブに包まれた手でリリーの太ももを優しく撫でる。いままでの戦いで負傷することはあったが、ここまで大きくやられたのはこれが初めてだった。心配そうなアイリスに、リリーはにこりと微笑み大丈夫と笑ってみせる。

「ありがと。でも、大丈夫だよ。お姉ちゃんがちゃんと治してくれるもんね!」

「……もうっ、百合ったら……」

「リリー、でしょ?」

戦いが終わった姉妹は、抱き合いながら避難していた人がちらほらと現れ始めた街を後にする。

しかし、二人は気づいていなかった。

ローズが、攻撃に飲まれる直前にハザドの蟲を放っていたことを。それが、二人の後を追跡していることを……。

*

鍵のかけられた無人の生徒会室に、青とピンクの光が生まれる。それが収まったとき、そこにいたのは先ほどまで街にいた、愛と百合の魔法少女姉妹だった。

「いたた……。もうっ、結局ローズも逃げちゃったでしょ？」

まだ変身したままのリリーは、ソファに腰掛け顔をしかめる。可愛らしい顔を歪ませている原因は、傷の痛みだけではない。あるとき、正義の雷撃に飲み込まれたように見えたデーモニックローズだが、ぎりぎりのところで転移魔法を使い、窮地を脱していたのだった。

「そうね、魔法を使った後があつたし……。でも、手傷は負わせたはずよ」

こちらに変身を保ったままのアイリスは、リリーの足下に跪き傷の具合を看ている。

「わたしも負っちゃったけどね」

ローズの赤紫のスカートから伸びる、筋の浮き出た禍々しく熱いモノ。なぜローズにこんなものが生えているのかを思うよりもまず、自分が受けている淫劇に頭が混乱する。「ああ……っ！ い、いいわよりりー。あなたの口マ○コ、暖かくて気持ちいいわ。ほら、もっと舐めなさい!!」

グイッと、伸びてきたローズの黒手袋がりりーのツインテールを掴み、乱暴に引つ張った。痛みには涙目になったりりーはそれをやめさせようとローズの手を掴むが、冷水に浸けられた純白グローブに力が入らず、正義の魔法少女は膝立ちでローズの肉棒に強制フェラをさせられる。

「ふごおっ！ んぶっ、べへえっつ!! ぶぶっ、ちゆる、れろおっ!! はぶううう……」（ひいんっ！ い、痛いっ!! わ、わたしの髪……ああっ！ なにこれ、先っぽからなにか出てきてるの!! 口の中、変なのが広がって……やらっ！ 変な気持ちになっちゃだめえっつ!! どうして……身体が勝手に舐めちゃう。こんな汚いの……ああ……やだあ……）

艶のある自慢の髪、お気に入りのツインテールを引つ張られ、ジュボジュボと口で奉仕させられるりりー。心はイヤがつているのに、熱に浮かされる身体が勝手にペニスをしやぶりだす。それが悔しくて情けなくてたまらない。

いつの間にか、髪を掴むローズの手に添えられていた純白グローブがふたなり魔女の太

ももをホールドし、舌先がレロレロと亀頭の先を舐め回す。

「ふ、ふふ……っ！ いいわよりりー。ううっ、なにも言っていないのに亀頭を舐めるなんて……あなた、才能あるわよ。くうっ！ さすがね……あなたの涎、熱くて……チンポ蕩けそうだわッ!!」

ローズの額に汗が滲む。気持ちいいというのは本当のようだ。その証拠に、デカマラの先からは止めどなく我慢汁が漏れ、リリーの唾液と混ざって唇の端から流れ出している。

「じゅぽっ！ れろれる……んぶうっ！ ちゅぱっ、ぬっぽお……。んにゅ……れる、ちゅぶ、ふ、ううんっ!!」

（くっ……か、身体が勝手に動いて……お股が……アソコがすごいのお……。こ、腰カクカクしちゃうっ！ 切ないよおっ。ふう、ふう……お、折れちゃ、ダメ……!）

魔的な香りを放つ淫蜜を溢れさせた秘部が訴えかける欲求は、すでに正義のヒロインの心を持ってしても制御できるものではなくなっていた。まるで心と身体が別のものになっってしまったかのように、セイクリッドリリーは物欲しそうに腰を振りながら、天性のものといえる極上フェラを続ける。

「あ、ああんっ！ い、いいわよセイクリッドリリー……! そんなテクどこで覚えたの？ フフ、純情そうに見えて、意外と遊んでいるのかしら……」

「んぶっ、ちゅぱっ……ううっ、こ、こんなことするの、初めてなんだから……っ。じゅ

「ぼおっ、ちゅぶ……んぐっ!!」

ビクビクビクッ! 口の中で時折ピクピクと動いていたペニス、突然動きを変えた。いままでとは違う、暴力的で力強い痙攣に、リリーの身体を強ばらせる。

「な、なに!? ビクンビクンって、なにが起こるの!? ううっ、こ、怖いよ……」

「んじゅぽおおっ! れろ、ちゅぶうっ!! じゅぽじゅぽっ!! びちゆるるうっ!!」

しかし、胸の内でする恐怖とは反対に、桜色の唇と舌はさらに強く肉棒を頬張り、亀頭を激しく舐め、尿道口を吸引した。その快感に、ツインテールを掴むローズは笑みこそ崩さないものの喘ぎ声を漏らす。

「あおおおおおおお……!! す、すごいわっ!! はあはあ、正義の魔法少女様がフェラしてると思うと、余計興奮する……っ! 射精するわよセイクリッドリリー!! あなたの口マ○コに膣内射精してあげる!」

ブルブルと震えるローズが、リリーの桃色の髪を手放し小さな頭を抱え込む。魔法の頬は真っ赤に上気し、頬を一筋の汗が流れる。

「んぶうううううっ!!」

「だ、射精すっ!! ふえっ、こ、これ、すごく熱くなつて……あぁっ! 膨らんでくる!! ひぐっ!? こ、こはダメ……ほんとに、なにか……引き返せなくなっちゃうっ!!」

なにが起こるか分からないものの、正義のヒロインではなく女の子としての勘が、これ

ーの動きが止まる。可愛らしいコスチュームに包まれた身体全体を衝撃が貫き、Dカップの美乳がプルプルと震えだす。

「くちゅ、くちゅ……くちゅ……ひ、あ……あひいいいいいいいんつつ!!」

大きな目をさらに見開いた状態で、無意識に口内の白濁汁を味わい飲み込んだセイクリッドリリーから、いままでで一番の嬌声が飛び出した。瞳孔が開き、カクカクと身体を震わせるリリーはぐらりと身体を傾けて尻餅をつく。そして、尻餅をついた開脚姿勢で、濡れまくったパンティを見せつけるかのように踵を上げると、ブーツをぶるぶる震わせながら純白グローブでコスチューム越しに秘部を刺激し始めた。

「ダメっ、ダメええええええつつ!! ローズの前なのに、こんなことしちゃダメえつつ!! 手がとまんないよおっ! いやあああああつつつつ!!」

くちゅちゅちゅちゅ……。リリーの指がパンティ越しに秘部をかき回し、卑猥な水音と本気汁がお漏らしのように溢れ出る。つま先と片手のみで支える身体が悲鳴をあげるが、それすらも媚薬に狂った身体には快感でしかない。涙を流す瞳はとろんと蕩け、だらしなく開いた口から精液混じりの涎が垂れる。

その無様な姿を見たローズは、ふたなりペニスの先端から漏れる精液をぺろりと舐めながら、バカにしたように唇を歪めた。

「フフ、やっぱり快樂には抗えないわね。いつもキャンキャン吠えてるうるさい小娘には、この触手チンポをくれてやるわ！」

シユルルルル！ ローズの声高な叫びと同時に、闇から触手が湧きだし、リリーの熱い身体に絡みついた。触手の先端からは、ローズのモノと同じく我慢汁がしたたり落ち、リリーの目の前でこれ見よがしに揺れる。

「ひあああんっ！　しょ、触手はやらあつっ!!　このおつ、焼き払ってやるうっ!!　りりー・せいくりっどお……ふれいむうっ!!」

快樂に緊張し、つま先立ちで震えるブーツや、秘部を必死にかき回すグローブに絡みついた触手を振り払うため灼熱の炎を出そうとしたリリーだったが、魔法少女の手足にはなんの変化もない。

「ふああああつ！　ああんっ、きゅはああんっ！　ま、魔法がでないっ！　せいくりっどふれいむ、せいくりっどふれいむうっ！」

「あははは！　魔力がなくなつても忘れちゃったのかしら？　触手ども、リリーのひくついたガキマ○コを貫いてあげなさい!!」

得意魔法を虚しく唱え続けるリリーを嘲り、ローズはトドメを刺すよう触手に指示を出す。

「いやあああああつっ！　そ、それだけは、ああっ！　身体が勝手に……いやっ！　わたし

し初めてなの！ 許して、初めてが触手なんてイヤだよおっつ!! ひ、あつ、ううんっつ」
 リリーはイヤイヤと首を振るが、イヤがっているのは彼女の正義の意志のみで、身体はすでに触手を受け入れるべく、さらなる愛液を分泌しようと指先の動きを激しくさせた。その動きにピンクのパンティが横にずれ、パンティの色に負けないくらいピンクの聖域が顔を見せる。左右対称の綺麗な形をした牝穴はパクパクと口を開き、おいしそうなラブリュースをトロリと垂らして迫り来る触手を迎える。

チュブ……。

(あ、ああああ……!! は、挿入ってくる……!! 触手のイヤらしいおちんちんがリリーの膣内に挿入ってきちゃうつ! イヤっ、いやあああつつ!! い、入り口に……ああつ、膣内にめり込んでくる……わたしの処女膜、破られ……ッッ!!)

恐怖に唇を、歡喜に陰唇をひくつかせるリリーの膣内に、触手ペニスがねじこまれる。そして、ほんの一瞬膣口に引つかかかったかと思うと、一気に乙女の純潔を奪い取った。

じゅぶううううつつ!!

「あつひいいいいいいいいいいいつつ!! イ、イッチやうううううううううううつつ!! い、痛いのにっ! いやっ、いやあああああああああああああつつ!」

ガクガクガクツツ! リリーの顔がのけぞり、ブシャブシャツと愛液が飛び散る。ところどころ赤く染まった愛液はリリーが処女を失ったことをはつきりと示し、痛みとともに

脳を支配する快楽に魔法少女は絶頂した。

「く、はぁあんっ！ う、動かないでよっ！ あひぁあ……いま、敏感で……やらっ、アソコひくひくしてえ……。う、ううっ……。こんなことして……。ローズう、許さないんだからあつ……。ひきゅううんっつ!!」

ドサツ！ 絶頂を終え、つま先と片腕で支えていた身体が床に落ちる。リリーは涙と悦楽に満ちた瞳でにやつく魔女を睨みつけるが、精神だけは反抗していても身体が動かない状況ではなんの迫力もない。

「へえ、まだそんなこといえるんだ。でも、そんな風に股を開いてヨガってたら全然怖くないわ。フフ、恥ずかしい格好ね」

「う、くううっ！ バ、バカにすんなあつ!! この……。つ、はぁはぁ……。あ、脚が、閉じられない……。触手ぬぷぬぷして、わたしの膣内かき回すなあつ！ で、でてつてよお！」
 （ひく、あぁあ……。い、イツたばつかなのに、ウズウズが収まらないよおつ。こ、このままじゃまたイツちゃう！ ローズにイクとこ見られちゃううっ！ 恥ずかしいよお……）

ガクガクガクッ！ リリーの身体が再び絶頂を前にした痙攣を始める。桃尻が小刻みに跳ね上がり、床に広がった様々な汁が混じった水溜まりにピチャピチャと音を立てる。両手は触手をきつく掴んではいるが、それは最早触手を抜くためではなく気が狂いそうな快

楽を耐えるために力をいれているに過ぎない。両足は、太ももからつま先までピンと一直線に伸ばされ、動かすこともできないでいる。

リリーの可愛らしい顔は汗や精液まみれで、歯を食いしばる口の端からは涎が流れ落ちる。頬は紅潮し性の悦びに震え、絶頂のときをいまかいまかと待ち望んでいるようだった。「もう限界なのね？ ほらいきなさい！ セイクリッドリリー!!」

ドクドクドクッ！ サディステイックな笑みを深めたローズが叫んだ瞬間、触手の柔らかな身体の根元がボコッと膨れ、徐々にそれがペニスの先端に向かってくる。

「ひっ！ ま、まさか射精すつもり！？ やめてえつつ！ い、いま射精されたら絶対にイッチャウ!! 膈内射精されたら赤ちゃんできちゃうよおつつ！ いやいやいやあああつつ!!」

「大丈夫、触手の精液じゃ孕まないわよ。でもお、すつごく気持ちいいから、気が狂わないようにね？」

触手の異変に首をもたげ、射精のときが迫っていることを認めたりリリーが悲鳴をあげる。悲痛な叫びはローズを喜ばせ、正義の心を闇に墮とそうとする魔女はリリーに優しく、そして残酷に告げる。

「ひぐうっ！ く、狂いたくない！ 気持ちいいのイヤッ！ ああつ、昇ってきてる、くる、イヤッ!! ああつ！ 射精される!! 膈内射精いやああああああつつつ！ ああ

っ！ 射精されちゃ……」

ドッピユ、じゅつぷうううううううつつつ！！ 目を見開いたリリーの膣内に、ついに触手がその精を放つ。衝撃にリリーは一瞬で昇りつめ、あっけなく絶頂してしまった。「あひあああああつつ！！ イクイクイクイクイクウツツ！ セイクリッドリリー、正義のヒロインなのに膣内射精されてイッチャううつ！ ひぐああああ、どぴゅどぴゅ頭おかしくなつちやうううつつ！！」

ビクン、ビクビクビクウウツツ！！ 膣内射精された魔法少女の身体が跳ね、受け止めきれなかった精液が逆流して噴き出す。リリーは触手を引きちぎらんばかりに握りしめ、頭の中を白濁に染めながらいき狂った。

「ひやくうんつ！ ま、まだ射精へるうつ！ 狂う、ダメになつちやううつつ！ リリーお姉ちゃん助けられないいつつ！！ いやあああああつつ、もうやめてええええええつつつ！」泣き叫ぶリリーに構わず、非情な膣内射精は数十秒に及んだ。身体にもかけられた精液はセイクリッドリリーのバトルドレスをこれでもかというくらい穢し、とても正義のヒロインとはいえないものに変えてしまっている。

精液に含まれる媚毒はリリーを肌の上からぐちゃぐちゃに陵辱し、膣内射精だけで十分にいき狂っていた少女をさらに淫獄に陥れていく。

「ぐじゅ……あぐ、ぜえ……はあ……はあ……あ、くひい……」

数分にも及ぶ、人間の女の子では受け止めきれないほどの濃く長い絶頂を終えたりりは、虚ろな瞳で虚空を見つめ、いまだに精液の残り汁をはき出す触手を愛おしそうに掴んでいた。

ローズはその傍らにツカツカと歩み寄ると、リリーの視線の先に顔を出し、しゃがんで問いかける。

「フフ、気持ちよかったですよ？ もう、正義の味方なんてやめちゃいましょう。そして、あなたもハザドに忠誠を誓うの」

身も心もボロボロにされたリリーの耳に染み渡る、闇の魔法少女の言葉――。リリーの瞳にわずかだが光が戻り、精液のこびりついた唇を小さく動かす。

「……ばっかじゃないの……？ わ、わたしは……お姉ちゃんを助けるまで……絶対にあきらめないんだから……!」

その言葉に、ローズの頬がピクツと動いた。そして、サツと立ち上がると、リリーの身体から触手たちを引かせる。

「へえ……まだあきらめないんだ……。じゃあ、見せてあげるわ。生意気な小娘に、現実つてやつをね……!!」

サアーツと、カーテンのように闇の一部が開ける。震える身体を起こしたりリーの瞳がその先にいた人影を捉え、歓喜に輝く。だが、それも一瞬のこと。唇が戦慄き、小さな声

が漏れた。

「……お姉ちゃん……?」

「……お姉、ちゃん……?」

身体を起こし、四つん這いで硬直したセイクリッドリリーの目の前にいるのは、蒼き水の魔法少女・セイクリッドアイリスだった。だが、ずっと助けたかった姉、きつといまも戦っていると信じていたリリーの心の拠り所は、焦点の合わない瞳を虚空に彷徨わせ、触手の海に沈んでいた。

「ああ……。はひ、イ、イきましゅう……。あはああんっ、ぎもぢいいいっ！ 触手もつと、ひあ、いいですうつつ!!」

ぐちゅ、にちゅじゅぽぽ……。聞いただけで羞恥を覚えてしまうような卑猥な音がリリーの耳を突き刺す。触手をしゃぶるアイリスは、リリーより遙かにひどい姿だった。

コスチュームを可愛らしく彩っていたふわふわの白いファーは、元の色が白だとは思えないほど茶色く汚されており、触手の粘液でねとねと垂れている。豊満な身体にフィットしていたスク水調の密着レオタードはどこどころ破れ、メロンのような胸が丸見えだ

*

った。ニーソックスはずり落ち皺だらけで、しとどに濡れて透けている。水色のブーツは片方が脱げかけで、離れていても強烈な媚臭が鼻をつく。秘部を隠していた布はリリーのパンティと同じく横にずらされ、数本の触手が膣口をこじ開け入り込んでいる。

「イック！ またイクウウウッ！ 触手イイッ！ ああつ、わたしのニオイすごいのおっ」

アイリスは、まだリリーが見ていることに気づいていない。浅ましく腰を振り、勃起乳首がピクピク動く。両手に一本ずつ触手を握り、ねちよねちよグローブで先端を擦って精液を搾り出す。美しかった髪もドロドロで、凜としていた表情は妹ヒロインが見たこともない魔悦に堕ちた牝豚の蕩け顔になっていた。

「あらあら、すごいことになってるわねえ。どう、セイクリッドリリー？ あなたが待ち望んだ姉妹の再会よ」

床に這いつくばったリリーの背後に立ったローズが、嘲笑混じりにそういった。だが、強気なツリ目を大きく見開き、姉を見つめるリリーの耳にはその言葉はなんの意味もなさない。

「お、お姉ちゃん……お姉ちゃん……！」

フルフルと首を振って、リリーはアイリスの傍に行こうと動き出す。力の入らない手足を無理矢理動かし、魔力を漲らせることも忘れ、赤ちゃんのようにハイハイしながら姉に

近づく妹ヒロイン。

「ひいんっ！ ま、まらイクっ……あああああんつつ!! ……ふ、あ……?」

その間にもアイリスはだらしなく絶頂し、開きっぱなしの膣口からピシュピシュとアクメ汁を放った。それは近づくリリーの手袋や顔にかかり、汁の熱さが姉が快楽に染まりきっている事実を突きつけてくる。ふと、アイリスの喘ぎ声が止まり、虚ろな瞳が触手の海的一步手前までやってきたリリーを捉えた。

「んあ……リリー……? はあはあ……んちゅ……れろ……」

「そ、そうだよアイリス！ わたし、リリーだよおっ!!」

アイリスが気づいてくれた——リリーの心に希望が戻り、健気な妹はローズの前であることも忘れ、姉の前だけで見せる妹の顔をして叫ぶ。だが、返ってきた反応はリリーの期待したのとは真逆のものだった。

「ひああああっつ！ イク、イク、イククウウツ!! リリー、リリー見てえつつ!! 気持ちイ
イツ！ いいのほおおおおおおおつ！ んほおおおおおおおお!!」

ドピユツ、ピュルルルウウウウウツツ!! アイリスの両手に握られた触手から大量の白濁液が放たれ、アイリスの美しい顔にべつちやりと付着する。同時に再び膣からアイリスの愛液が噴き、リリーにぺちゃぺちゃとかかった。

「お、お姉ちゃん……ごめんね……ごめんね……。わたしが早く助けられなかったから……」

…お姉ちゃん、すぐ行くから…：ひやあああんつつ!!」

どこまでも姉を想い、穢された身体の中に清らかな心を持ち続けるリリーの手がアイリスに触れそうになる。だが、あと数センチまで指先が迫ったところで、四方八方から触手が伸び、グローブにねちやみちやと絡みついて引きはがした。

「ひぐうっ!? は、離せ…：離してよおっ!! ひんっ、く、ふわあああつつ!! か、絡みついてくる…：そんなっ、ここまで来たのに…：ううっ、ローズうううつつ!!」

いままで振り払えていた触手の動きが機敏になり、リリーを拘束して持ち上げる。リリーの怨嗟の叫びを受けたローズは、涼しい顔で触手たちに指示を出していた。

「ああっ! い、痛いよ、やだあっ! またこれぬりぬりされて…：ひ、くっ…：ダメ、熱くなっちゃだめえっ! ローズ、こ、今度はなにを…：!!」

持ち上げられた小柄な身体に、幾本もの触手が巻き付き、じゅくりと淫汁を分泌し塗りとたくる。先ほどの絶頂で少しだけ鎮まっていた淫悦が再び燃え上がり、乳首が勃起しクリトリスが切なげにひくつく。思考を吹き飛ばし、正義のヒロインを快楽を求めるだけの牝に変える責めに、リリーは姉への想いだけで必死に理性を繋ぎ止めていた。

「なについて、すっごく愉しいこと…：わたしも、アイリスもあなたも幸せになれる素敵なことよ?」

謎めいた言葉を発し、ローズはパチンと指を鳴らす。それがどんな意味を示すのかりり

ーにはわからないが、少なくともリリーの考える幸せとはほど遠いことは明らかだ。

シユルルル……。縛られたリリーの目の前で、アイリスの身体に絡みつくと触手がたちが引いていく。拘束を解き、驚くほどの早さで闇に消えていく肉蛇——。「なにをしているの!？」というリリーの問いかけは、アイリスの声でかき消された。

「あああつ!?　しょ、触手が……。いやつ、どうして!?　欲しい、我慢できないわ!　ああつ!　なんでもいいから慰めてえつ!!　あひいつつ、こんなんじゃ足りないのよおつ!!」
ぐつちゅぐつちゅ!　突然触手から解放されたアイリスは、床の上でM字開脚すると、自分の秘部に粘液まみれのグローブを突っ込み、卑猥な音を立てながらかき回す。それは次第に激しさを増し、お漏らしのように愛液を溢れさせながら少し前まで処女だったとは思えないほどの淫乱っぷりを見せつけた。

淫らな姉のオナニーに絶句するリリーの後ろ、ローズは声をその妖艶な声を響かせ、氷の魔法少女に悪魔の言葉を投げかけた。

「アイリス、リリーを責めてみたら?　きつと気持ちいいわよ」
「ふえつ!　ローズ、あなたなに言つて……。お、お姉ちゃん!？」

まさかの言葉にローズを振り返ったリリーだったが、不穏な気配にハッとアイリスに視線を戻す。淫汁に塗れた淫靡な蒼髪を垂らしたアイリスは、四つん這いでゆつくりとリリーに近づいてきていた。あれだけ傍に行きたかった姉が近づいてきてくれている——だと

いうのに、リリーの心には不安しかない。

「フフ、リリー……お姉ちゃんと一緒に気持ちよくなりましょう？」

「お姉ちゃん……嘘だよね？　しつかりして！　ローズの言葉になんか惑わされちゃダメえっ！」

リリーの呼びかけにも応えず、アイリスは着実に妹との距離をつめ、触手に持ち上げられ身動きのとれないリリーの足先にまでやってきた。

リリーの、拘束から逃れようともがくブーツに守られた足先にアイリスの指が触れる。その途端、ゾクゾクとした感覚がリリーの背筋を走り抜けた。

「ひあっ!!　つ、つめた……っ!!」

（ううっ、力がぜんぜん出ない……。お姉ちゃん……。ああっ、お姉ちゃんが見つめて……。ダメ、なんでわたしドキドキしてるの!!　姉妹でこんな……。ダメだよっ!）

ローションのような媚粘液で滑るアイリスの指が、ブーツから太もも、股間を撫でる。ピタリと秘部に添えられた手のひらから、冷たさの中にある姉の暖かい体温が伝わってきた。それだけでなく、姉の心の奥底に眠っていた妹への過激な感情も――。

「ゆりい……お姉ちゃんとエッチしよう？」

「なっ……!!　お、おねえちゃ……。んちゅっ!!」

スッと、思考の固まったリリーの間隙をついたアイリスの唇が、リリーの口を塞いだ。衝

撃に目を見開くりリーの口の中を、アイリスの舌がジュブジュブと犯す。

「ちゅ、れろ……んあ……ああ……」

（お姉ちゃん……やだ、頭がポーツとしてきちやう……。触手に虐められてばかりだったから……ひあ、流されちゃ、ダメ……なのに……）

ちゅぷ、ちゅぷ……。正義の魔法少女として、なにより愛する姉を助けるためにリリーは自分を鼓舞するが、その愛する姉が絡めてくる舌にたちまち思考が蕩けていく。やがて、ぎこちないながらもアイリスに合わせ舌を使い始めたリリーは、触手に絡まれた指先を切なそうに震わせ、姉との禁断のディープキスを堪能しだした。

「じゅば、ちゅぷ、んあ……ゆりい……んちゅうっ！」

「ひあ……ぴちゅ、くふ、れろれろ……ああっ！ お、お姉ちゃん、そこはあ……！」

ビクビクッ！ アイリスの淫らな指先に、片側の勃起した乳首を挟んでコリコリと転がされたリリーはたまらず唇を離し熱い吐息を漏らす。もう片方の乳房には、変身しても敵わない、姉の爆乳乳房が押しつけられ、大きく膨れあがった乳首同士がコスチューム越しに擦り合わされ姉妹に悦楽をもたらず。

「こんなに大きくしちゃって……やっぱりコンプレックスだったのお？ しつてるわよ、百合は乳首がすごく敏感だって……。変身しても、それは変わらないみたいね」

「そ、そんなこと……っ。あやあっ！ やめ、くひいつ……き、気持ちいいっ……!!」

姉の言葉に首を振りつつも、真っ赤に染まる顔と上擦る声が、アイリスの指摘が正しいことを証明してしまう。コンプレックスだった貧乳が巨乳に変わったのはいいが、さらに敏感になってしまったそれを罵られ、さらに言葉でなじられるともうたまらない。リリーは思わず快感を口に出し、腰をうねうねと動かしてこみ上げてくるなにかを発散しようとする。

（ううっ、お姉ちゃんうますぎるよお……。わたしの胸、お姉ちゃんにおもちやにされて感じちゃってる……！ ああっ、わたしのアソコ、疼いて痒くて……。切ないの、ふああっ！ お姉ちゃんの指欲しいよお……。アソコに挿れて欲しい……）

瞳を潤ませ唇を震わせるリリーの陰唇がヒクヒクと動き、桜色の膣内からクチュクチュとイヤらしい音が聞こえてくる。大好きで憧れの姉に責められている——普段なら、姉の過剰なスキンシップだと笑って躲せるはずが、媚薬で発情し、魔法少女に変身して敗北を喫しているという惨めな姿がマゾヒスティックな快感を生み出し、妹ヒロインを魔悦の檻に捉えて逃がさない。

そして、そんな妹の欲望に気づかないアイリスではない。姉妹という枠を超えた姉の愛情は妹の欲情を察知し、ディープキスと乳首同士の擦り合いを続けながら秘部に手を伸ばした。

くちゅ、につちゅ、くちゅちゅ！

「あつっひいいいいいいいっ！ ひあつ、わたしのアソコかき回されてるよおっ！ お姉ちゃんの指が、わたしの膣内じゅぷつてえっつ！」

「あああつっ！ いいわよ百合!! そんな顔されると、わたし……ふあつ！ い、弄りたくなつちゃう!! わたしのマ○コが疼いてしまうわ!!」

秘部の膣内に指を挿れられただけで嬌声をあげてしまうリリーに、アイリスはたまらず太ももを擦り合わせた。たまらなく激しい欲望に、アイリスは開けたリリーの太ももを両脚で挟み込んで妹のムチムチ太ももに股間をなすりつける。剥き出しになっているラビアからねつとりと濃い糸が伸び、快楽に洗脳されたアイリスが本気で感じていることをリリーに伝えてくる。

（お姉ちゃん……アイリスがこんなにわたしで感じて……はうううっ！ このままじゃ、わたしもおかしくなっちゃう……。なんとか、しないとぉ……）

「ひいんっ！ くひっ、はあはあつっ！ ふわあああつ!! お姉ちゃん、そんな、激しすぎっ……ひぎいっつっ!! エツチなお汁でちゃうよおっつ!!」

ぷしゃぷしゃっつ！ リリーが声高に叫んだ瞬間、触手に乱暴され発情した膣から、自分で思った以上の愛液が飛び出し、魔悦に抗い続ける純真ヒロインの顔を羞恥に染める。

「はあはあはあ……。リリー、すごく感じてるのね……お姉ちゃんに任せて……この触手を使って、もつと気持ちよくしてあげるから……」

そんなりりーに対し、アイリスは妹を拘束している触手の一本を妖しく撫で誘導すると、先端の亀頭を擦りながらりりーの膣口に近づける。そして、あろうことかその気色悪い触手のボディを抜き、搾精を始めた。

「あぁっ！ ア、アイリスなにしてるの!? ダメだよ、そんなの扱いたら、臭いお汁が射精で……イヤッ！ いまそれかけられたらイツちゃうっつ!!」

ギムムツ、グチュツ、ギチギチ！ 痙攣する触手から白濁液が噴き出す予感に慌てたりりーが身を振る。しかし、魔力もほとんど残っていない変身ヒロインを締め付ける肉縄を振りほどくことはできず、触手の中を精液が昇ってくるのを見ていゝことしかできない。

（はぐうっ!! グローブとブーツに触手が食い込んで……う、動けないっ！ あぁっ、射精されちゃう……アソコの入り口にたっぷり……ううっ、ピラピラにかけられたら、絶対に……あ、だ、射精される……っ！）

「おほおっ！ で、射精るわよりりりー！ たっぷりかけてあげるわあつつ!!」

ドッピユ、びゅるるるるるるるるるるらうううっつ!! アイリスの艶声とともに、熱々の濃い牡汁がりりーのラビアにべっちよりとかけられた。絶頂の予感にりりーの息が詰まり、身体が硬直する。そして――。

「ひぐっ……イ、イツツクウウウウウウウウツツ!! 触手精液ぶっかけられていっつちやうううっ！ イヤッ！ ダメダメダメへええええっ!!」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>